

嶋崎尚子・中澤秀雄・島西智輝・清水拓・張龍龍・
笠原良太『台湾炭鉱の職場史：鉱工が語るもう一つの台湾』

菊池，美幸
立教大学：助教

<https://doi.org/10.15017/7344013>

出版情報：エネルギー史研究：石炭を中心として．40，pp.191-195，2025-03-25．九州大学附属図書館
付設記録資料館産業経済資料部門
バージョン：
権利関係：



【書評】 嶋崎尚子・中澤秀雄・島西智輝・清水拓・張龍龍・笠原良太
『台湾炭鉱の職場史——鉱工が語るもう一つの台湾』

菊 池 美 幸

本書は、戦後の台湾において最大規模の炭鉱であった瑞三炭鉱（新北市）を主たる分析対象とし、炭鉱で暮らした人びとの労働と生活の記憶をオーラルヒストリーに基づき再現することを試みている。全章を通して目的は、炭鉱の記憶を保存し、それを産業史や労働史の点から再構築すること、近年急速に進みつつある炭鉱の遺構と合わせて、鉱工（炭鉱夫）たちの地下で経験を理解するための手がかりを示すことにある。

最初に本書の分析対象となる瑞三炭鉱について、触れておこう。瑞三炭鉱は、台湾で有力な請負領班（採炭工程を請け負うグループのリーダー）だった李建興が、一九三四年に基隆炭鉱の鉱区払い下げを受けて、現在の新北市瑞芳区に瑞三炭業公司を設立したことに始まる。一九三〇年代は順調に経営を続けたが、一九四〇年に李建興とその兄弟、および従業員らが誣告によって祖国通牒の罪（外患罪）で台湾総督府に逮捕され、多くは日本の敗戦まで収監された。そのため、この間は、一九四二年に釈放された李健興の末弟と基隆炭鉱社によって開発と生産が続けられた。李建興は、第二次世界大戦後の一九四九年に、改めて台湾工鉱

公司から採掘権を継承し、彼のもとで、瑞三炭鉱は台湾最大級の炭鉱として繁栄した。最盛期の一九七三年には、一、四五九人（職員一四四人、鉱員一、三二五人）の従業員を抱え、出炭量も年産二〇万トンを超えていたが、一九八〇年代に入ると斜陽化は避けられず、一九九〇年には閉山に至った。

以上のような経緯をたどった瑞三炭鉱は、現在、産業遺産として保存されている。その特筆すべき点は、炭鉱閉山後も鉱工の多くが居住しつづき、基本的な施設がすべて地域内に残されたまま、いまなお活用（猴硐炭鉱博物園區という炭鉱をテーマにした生態博物館として営業）されていることにある。そのため、炭鉱稼働当時の遺構や街並みが残存し、かつ、地域に根付いた元鉱工らの努力によって日々更新されつづけていることから、炭鉱や産業遺構に興味がある者たちにとって大きな魅力となっている。本書のオーラルヒストリーの多くは、瑞三炭鉱で請負班の領班を長らく務めた周朝南氏や、その関係者への聞き取りが中心となっている（第2章および第2部）。前置きが長くなってしまうが、本書の

構成は、次のとおりである（ ）は執筆者。

〔第1部「煤鉱 Meikang」の歴史と現場〕 序章 台湾炭鉱への招待（中澤秀雄）／第1章 台湾石炭産業と「李顔二家」（島西智輝）／第2章 瑞三炭鉱の生産と労働（清水拓）／第3章 台湾光復以降の石炭産業史（張龍龍）

〔第2部 瑞三での鉱工の仕事と暮らし〕 第4章 炭鉱の子が鉱工になるまで（嶋崎尚子）／第5章 台湾最大の瑞三炭鉱での領班の仕事（嶋崎尚子）／第6章 瑞三炭鉱の閉山とその後（嶋崎尚子）／第7章 女性鉱工の生活史（嶋崎尚子）／第8章 猴硐での元鉱工たちの年金獲得運動と炭鉱の記憶継承（笠原良太）／終章 台湾石炭産業の職場史に学ぶ（嶋崎尚子）／あとがき／索引

序章「台湾炭鉱への招待」では、本書の記述の大半を占める瑞三炭鉱を含めた猴硐地区の様子が紹介される。近年、台湾では伝統的建築物の活用が進み、建築物単体だけでなく、町並みも含めた遺構の保存が急速に進んでいる。このことは、猴硐地区や炭鉱遺構についてもあてはまり、筆者の言葉を借りれば「生きた炭鉱として生動的に保存されている」コミュニティとして、貴重な存在となっている。序章では、瑞三での職場の様子も記述され、最後に、東アジアという枠組みのなかで、日本と台湾の関係や、台湾における石炭産業の位置づけが説明されている。

第1章では、最初に台湾の炭田について地理的特徴や、炭鉱の規模など石炭産業の概要が説明される。その上で、台湾石炭産業を牽引した二家、すなわち、瑞三炭鉱を経営していた瑞三炭業の李家と、新平溪炭鉱を経営していた台陽炭業（のちに第二会社化を経て売却）の顔家の事業展開が紹介されている。両家は、それぞれ「瑞芳李家」「基隆顔家」と呼

ばれる台湾の大鉱業家で、特に戦後の石炭産業の発展に重要な役割を果たした。本章の後半では、戦後の台湾石炭産業の担い手についても言及し、先行研究では、国民党政権が民間資本の成長を警戒し、金融・エネルギーという「管制高地」をほぼ独占したという説明に対して、著者は、エネルギー部門の中でも石炭産業は異質で、民営炭鉱が生産の主軸になったことを指摘している。

第2章では、瑞三炭鉱の元鉱工の証言をもとに、坑内で鉱工がどのように働いたのか、生産組織の編成、坑内概況、採炭現場のレイアウト、人員配置と作業内容という点から再現されている。さらに、炭鉱内での仕事の様子が、豊富な写真とともに明らかにされている。本章で特筆すべき点は、坑内概況と採炭現場のレイアウトに関する記述についてであろう。ここでは、瑞三炭鉱構内図という炭鉱全体の見取り図から坑内の構造が丁寧に説明され、さらには、採炭現場における採炭方式の解説から実際の人員配置、鉱工の動線までが見事に再現されている。その結果、平面図からイメージしにくい地下の立体的な労働現場の構造や、そこで働く鉱工の姿が有機的に結びつき、稼働する炭鉱の姿を知ることができる。

第3章では、第二次世界大戦以降の台湾石炭産業史について、生産回復と増産（一九四六～一九六四年）、「油主炭従」政策下の「油炭競走」（一九六五～一九七二年）、スクラップ・アンド・ビルド（一九七三～一九八三年）、全面撤退（一九八四～二〇〇〇年）の四つの時期区分に基づき概観している。そして後半には、石炭産業の終焉とともに、政府が文化政策を実施し、炭鉱を産業遺産として保存したことが紹介される。このような台湾石炭産業の保存活動をめぐっては、その特徴として、産業

遺産の記憶保存および継承に、産炭地コミュニティや元炭鉱マンの積極的な協力が得られたことも挙げている。著者は、こうした炭鉱の閉山後の取り組みが、他地域とは異なる「台湾モデル」であると指摘する。

〔第2部 瑞三での鉱工の仕事と暮らし〕は、著者たちが台湾で実施した聞き取り調査の内容をオールヒストリーとしてまとめたもので、鉱工の実際の仕事や暮らしが紹介される。

第4章～6章では、瑞三炭鉱で鉱工として活躍した周朝南氏の生活史が詳述される。周氏は、一九四四年に台湾北部の猴硐近郊の村に生まれ、祖先は、大陸の福建省泉州から開拓で入った漢人の一族であった。周氏は入植者の第五世代に当たる。両親や親族は、周氏が生まれたときから瑞三炭鉱で働いており、周氏も一六歳（一九五九年）のときに童工（子どもの労働者）として瑞三炭鉱で働きはじめた。周氏のキャリアは、彼の職場であった瑞三炭鉱の命運と共にあり、ひいては台湾石炭産業の盛衰を投影したものであった。

著者らは、周氏が炭鉱で働いていた同時期に、女性鉱工として働いた四人にも聞き取りを行っている。このうち周氏の母親については第4章に、周氏の妻・呉宝銀氏については第5章・6章に収められている。さらに周氏のいとこの妻・周方糖氏と林首氏の生活史については7章に収録されており、いずれも炭鉱労働と家庭労働の過酷な様子が記述されている。

一九九〇年に瑞三炭鉱が閉山すると、周氏は四七歳で職を失う。そのため、新しい職を求めて祖先の地である福建省泉州市で貿易の仕事をはじめた。それが大成功し、二〇〇五年には再び台湾へ戻ってきた。台湾では、ちょうど同じ年に国民基礎年金制度が成立するものの、その対象

者は、二〇〇五年以降に退職した職工に限られた。つまり、炭鉱閉山後に離職した鉱工は適用対象外になったのである。そのため、周氏は元鉱工に対する年金体制の改正を求めて、運動を開始した。その第一歩として、二〇一九年には、鉱工について、国民の理解を深めてもらうことを目的に、猴硐鉱工文史館を私費で設立したのである。この猴硐鉱工文史館は、本書評の瑞三炭鉱の説明部分で述べた、猴硐煤鉱博物館区の展示の核となるものである。この詳しい経緯と年金制度改正に向けた運動の展開については、第8章で詳述されている。

終章では、これまでのオールヒストリーに基づく瑞三炭鉱の分析を踏まえて、台湾石炭産業の特徴を、労働形態、女性労働、労働災害と補償、会社と労働者の関係という四つの点からまとめている。さらに後半では、諸手当給付の台帳である「補助簿」を用いて、労働災害の発生頻度や補償の状況が明らかにされている。

以上が、本書のおおまかな要約となる。評者は、台湾の石炭産業について、本書から得ることが非常に多かった。また、本文に書かれているように、「日本の炭鉱と類似性・連続性がきわめて強い対象（一〇二頁）」であるという点についても納得できる部分が多かった。他方で、本書を読んで、分かりにくかった点や疑問を感じた部分もいくつかあった。以下では、これらの点について述べたい。

第一に、台湾において、石炭産業が果たした役割に関する評価についてである。本書では、台湾石炭産業の歴史について、第1部で記述されているが、記述の多くは生産・労働に偏っている。本書のタイトルが「職場史」である以上、これらの内容に記述が割かれることは当然であろう。他方で、各章に通ずる前提として、「台湾で生産された石炭は、台湾の産

業化や経済発展のみならず、社会にとっても重要な役割を果たした」という共通認識があるように思われる。この点については、評者も異論は無く、それが史実あるからこそ、元鉱工たちが鉱工年金制度の成立を目指し、年金獲得運動を展開していることも理解できた。この点については、第2部のオーラルヒストリーからも裏付けられよう。しかし、そうであるからこそ、本書には、台湾で生産された石炭が、各時期において、どこで何のためにどのように消費されたのかという視点が、必要であるように感じた。例えば、第3章では「石炭だけでは、電力会社やほかのセクターエネルギー需要を満たすことができなかった（八二頁）」との記述があり、おおよそ推察することは可能であろう。しかし、台湾石炭産業が光復後の発展に貢献したという事実を強化するためには、台湾で掘られた石炭が、台湾でどのように使われたのかという視点もあっても良いように感じた。

第二に、台湾における労働者に対する保護立法や補償制度の仕組みについてである。本書の各章より、台湾における労働安全規則や、労働災害に対する保障制度を間接的に理解することは可能であろう。ただし、これらの制度や仕組みについてまとまった記述が無いため、例えば、労働災害が発生した場合に、どのような救済の仕組みが存在し、誰が、どこまで労働者に対する責任を、どの程度負っていたのか判断としなかった。また、一九六四年に禁止された女性の坑内労働についても、前述した枠組みの中での評価を加えた上で、制度の問題点などを論じても良かったのではないだろうか。さらに、一九八四年に発生した三大変災への対処が、その後の台湾における労働者保護や保障制度にどのような影響を与えたのかも気になった。

続いて、やや細かい疑問点になるが、第3章の台湾石炭産業において、閉山局面をもたらした主要な原因を三つ挙げているが、そのうち、第三の炭鉱労働者の労働環境の悪化（八五―八六頁）についての指摘である。この中で、八〇年代後半の炭鉱労働者の低賃金の主な原因について、台湾の炭鉱の自然条件（薄炭層のために機械化が進展しなかったこと）を挙げているが、この説明はやや語弊があるのではないか。政府の政策としては、一九六五年の時点で石油の使用を奨励し、六九年には石炭価格への介入に終止符を打っている。こうした一連の政策転換は、既に石炭産業へ影響を及ぼしはじめており、一九七〇年代に入るとその影響はさらに色濃くなっていた。このような状況を踏まえると、一九七〇年代以降、炭鉱で機械化が進まなかった主な要因は、自然条件の問題以上に、安価な輸入炭の流入や政府の政策転換など、石炭産業の緩やかな衰退を背景として、企業が資本を投下して機械化を進めるインセンティブを失ったことにあつたのではないだろうか。そのため、労働生産性も上昇せず、労働者の賃金も上がらないという状況になったのではないだろうか。

また、終章の「2 炭鉱での女性労働」の記述内容についても、やや疑問を感じた。著者は、戦前日本の炭鉱を事例に、一九二八年の改正鉱夫労務扶助規則により保護鉱夫（女性と若年者）の深夜業と坑内労働が禁止されたことを挙げ、その結果、女性を解雇した埋め合わせに男性労働者へ「家族賃金」が登場したこと、さらには、そのために女性労働者の労働が低賃金化したと述べている（二〇三―二〇四頁）。確かに、戦前の大手炭鉱では女性の坑内労働が禁止されたため、坑外労働への転換がおこなわれ、内職が奨励されている（野依、二〇一〇）。そのため、後山だった女性労働者が得られる収入が減少したことは事実であろう。他方

で、戦前日本の炭鉱においては、坑外労働の賃金は、もともと坑内労働の賃金より低く設定されていたのも事実である。つまり、坑内労働から坑外労働への配置転換をもって、収入が減少したことを「低賃金化した」としているならば、それは果たして「低賃金化」と言えるのだろうか。女性労働者の労働が低賃金化したと記述するのであれば、同一職種間での比較を踏まえて、このように述べるべきだと感じた。

以上、評者の手前勝手な疑問点や要望を書き連ねた。このような意見は、本書の成果の上に成り立つもので、その価値を減じるものではない。これまでの歴史研究において、台湾の石炭産業に関するものは多くなく、また、無くなりつつある産業の職場史をオーラルヒストリーで残すという点でも、本書は貴重な成果であろう。社会学や歴史学の研究者のみならず、地域振興、文化保存、産業政策、エネルギー分野などに関心をもつ多くの方々にも一読を勧めたい。

(青弓社、二〇二四年、三、三〇〇円〔税込〕)

参考文献

- 荻野喜弘(一九九三)『筑豊炭鉱労資関係史』九州大学出版会。
野依智子(二〇一〇)『近代筑豊炭鉱における女性労働と家族——「家族賃金」観念と「家庭イデオロギー」の形成過程』明石書店。